
日本ロシア文学会
第 65 回大会資料集

2015 年 11 月 7 日（土）～ 8 日（日）
埼玉大学

日本ロシア文学会

第 65 回 (2015 年度) 定例総会・研究発表会は、来たる 11 月 7 日 (土), 8 日 (日) の両日, 埼玉大学にて開催されます。研究発表会では、29 件の個別発表 (A, B, C), 2 件の企画パネル (P), 併せて全 10 ブロックが設けられます。ふるってご参加ください。

以下の日程をご確認の上, 事務局・大会実行委員会からの問合せメールに対し, 10 月 25 日 (日) までに参加予定をご返信くださるようお願いいたします (返信先: conf@yaar.jpn.org)。

11 月 7 日 (土)							
開会式 09:40-09:55 総合研究棟 1 階シアター教室							
		第 1 会場 総合研究棟 1 階 シアター教室		第 2 会場 総合研究棟 2 階 11 番講義室		第 3 会場 総合研究棟 2 階 12 番講義室	
研究発表	10:00-10:35	A01	ブロック ①	B01	ブロック ②	A04	ブロック ③
	10:35-11:10	A02		B02		A05	
	11:10-11:45	A03		B03		A06	
昼食・理事会	11:50-13:00	理事会 総合研究棟 1 階シアター教室					
研究発表・ パネル	13:05-13:40	A07	ブロック ④	A11	ブロック ⑤	P01	ブロック ⑥
	13:40-14:15	A08		C01			
	14:15-14:50	A09		C02			
	14:50-15:25	A10		C03			
大賞受賞記念講演	15:40-16:40	総合研究棟 1 階シアター教室					
定例総会	16:50-18:00	総合研究棟 1 階シアター教室					
懇親会	18:10-20:10	埼玉大学生協第 2 食堂					

11 月 8 日 (日)							
		第 1 会場 総合研究棟 1 階 シアター教室		第 2 会場 総合研究棟 2 階 11 番講義室		第 3 会場 総合研究棟 2 階 12 番講義室	
研究発表・ パネル	09:50-10:25	A12	ブロック ⑦	A17	ブロック ⑧	P02	ブロック ⑨
	10:25-11:00	A13		A18			
	11:00-11:35	A14		C04		B04	ブロック ⑩
	11:35-12:10	A15		C05			
	12:10-12:45	A16		A19			
各種委員会	12:45-13:45	編集委員会: 総合研究棟 2 階セミナー室 5 学会賞選考委員会: 同 2 階セミナー室 6 広報委員会: 同 2 階セミナー室 7 その他の委員会: 同 1 階ホール					

会場案内

- 〈受付〉総合研究棟 1 階ロビー
- 〈控室・談話室〉同 1 階ホール
- 〈書籍等販売〉同 1 階ホール

第1日研究発表 11月7日(土) 総合研究棟

第1会場 1階シアター教室				
ブロック・日時	番号	発表者	題目	司会者
ブロック① 11月7日 10:00-11:45	A01	山下大吾	『青銅の騎士』における西洋古典的要素について	鳥山祐介 三好俊介
	A02	菅原彩	レールモントフの物語詩『ムツイリ』における空間	
	A03	井上幸義	レールモントフの物語詩『デーモン』のタマーラとバラード『タマーラ』の同名の主人公	
ブロック④ 11月7日 13:05-15:25	A07	斎須直人	ザドンスクのチーホンとドストエフスキー：マリーと子供たちについてのムイシュキンの語りにおける聖者伝的伝統	佐々木寛 越野剛
	A08	上西恵子	『罪と罰』における視覚動詞 <i>глядеть</i> の機能	
	A09	泊野竜一	ドストエフスキーと19-20世紀の文学における対話表現での分身	
	A10	ТАРАСОВА Наталья	Значение графики в творческих рукописях Ф.М. Достоевского	
第2会場 2階11番講義室				
ブロック・日時	番号	発表者	題目	司会者
ブロック② 11月7日 10:00-11:45	B01	ЖДАНОВ Владимир, 鈴木淳一	Художественный текст как базовый фактор формирования лингвокультурологической компетенции	小林潔 柳町裕子
	B02	黒岩幸子	日本のロシア語教程における「硬・軟母音」の起源と定着について	
	B03	ЛАТЫШЕВА Светлана	Роль диктантов в обучении японских студентов русскому языку	
ブロック⑤ 11月7日 13:05-15:25	A11	河島孝子	エルショーフ(1815-1869)『魔法の仔馬 Конек-Горбунок』後の作品にみる文学的志向—生誕200周年によせて	毛利公美 久野康彦
	C01	三浦領哉	「前国民楽派」期のВ.Ф.オドーエフスキーにおける音楽思想の変遷	
	C02	一柳富美子	演奏会及び劇場上演データに見る19世紀ロシアの音楽界	
	C03	生熊源一	コンセプチュアリズムとアクションイズムのつながり	
第3会場 2階12番講義室				
ブロック・日時	番号	発表者	題目	司会者
ブロック③ 11月7日 10:00-11:45	A04	高田映介	チャーホフの創作におけるダーウィン進化論の影響	乗松亨平 宮川絹代
	A05	田子卓子	ブーニン『スホドール』における語りの可能性	
	A06	林由貴	イワン・ブーニンにおける「帝国」と「言語」	

<p>ブロック⑥ 11月7日 13:15-15:15</p>	P01	望月恒子, 諫早 勇一, メリニコ ワ・イリーナ, 澤田和彦, 大野 斎子	在外ロシア文化と同時代の世界	望月恒子
---	-----	---	----------------	------

第2回日本ロシア文学会大賞受賞記念講演

11月7日(土) 15:40-16:40 総合研究棟 1階シアター教室

受賞講演者	講演題目
吉岡ゆき	私とロシア語

第2日研究発表 11月8日(日) 総合研究棟

第1会場 1階シアター教室				
ブロック・日時	番号	発表者	題目	司会者
<p>ブロック⑦ 11月8日 09:50-12:45</p>	A12	石原公道	ブルガーコフ学成立試論	<p>平松潤奈 大森雅子 中野幸男</p>
	A13	古宮路子	オレーシャ『羨望』手稿のヴァリエントを巡る問題	
	A14	古川哲	1930年前後のプラトーフ作品における空虚なもの	
	A15	野中進	V.グロスマンの長編小説におけるメトニミー的原理(『正義のために』と『人生と運命』)	
	A16	笹山啓	ペレーヴィンはなにから目覚めるのか	
第2会場 2階11番講義室				
ブロック・日時	番号	発表者	題目	司会者
<p>ブロック⑧ 11月8日 09:50-12:45</p>	A17	坂中紀夫	推理作家ロマン・キムと主体性の問題	<p>加藤百合 桜井厚二 上田洋子</p>
	A18	南平かおり	児童文学者としての秋田雨雀とロシア文学 ～童話にみるトルストイの作品の影響～	
	C04	内田健介	小山内薫はスタニスラフスキー・システムの受容者だったのか?	
	C05	松枝佳奈	大庭柯公(1872-1922頃)と第一次世界大戦下のロシア—従軍ロシア人作家・ジャーナリストたちの視点から	
	A19	靱内裕子	二葉亭四迷の生年について—文久2年(1862年)の可能性	
第3会場 2階12番講義室				
ブロック・日時	番号	発表者	題目	司会者
<p>ブロック⑨ 11月8日 10:00-11:30</p>	P02	三谷恵子, 服部文昭, 三浦清美	中世スラヴテキスト研究の新たなアプローチ	三谷恵子
<p>ブロック⑩ 11月8日 11:35-12:45</p>	B04	丸山由紀子	ロシア語文献における第2次南スラヴの影響をめぐって—パホーミイ編集『ラドネシのセルゲイ伝』を資料として	古賀義顕
	B05	KOBERNYK Nadiya	ロシア語における基動詞への-sya接辞の付加基準について	

会場校からのお知らせ

【大会実行委員会へのお問い合わせ】

埼玉大学人文社会科学部研究科

〒338-8570 さいたま市桜区下大久保 255

(野中進研究室) 電話 048-858-3759 E-mail: nonaka@mail.saitama-u.ac.jp

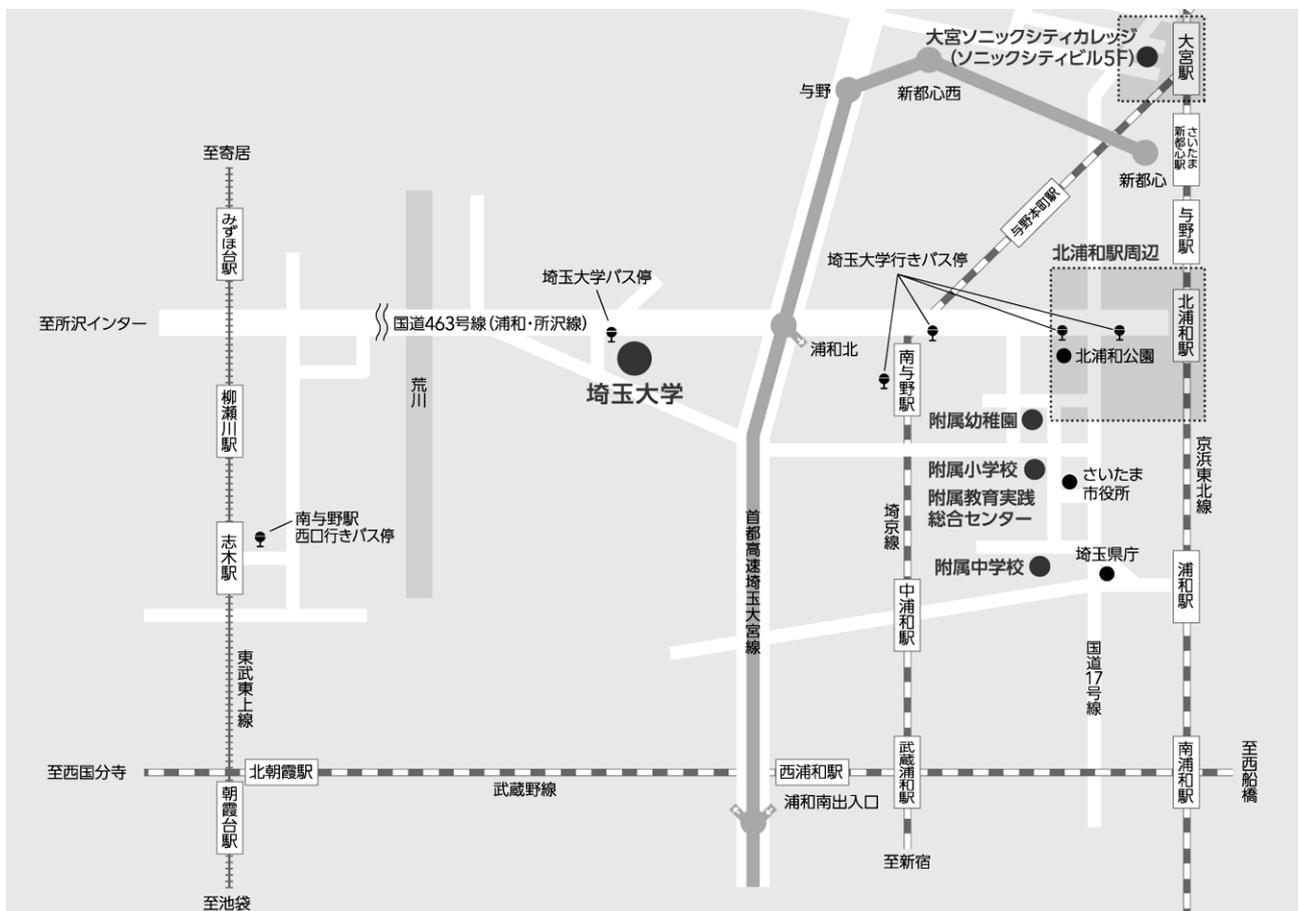
(澤田和彦研究室) 電話 048-858-3648 E-mail: sawada@mail.saitama-u.ac.jp

【宿泊・昼食その他】

- ・ 宿泊先の手配は会員各自でお願い致します。学会 HP で近隣のホテルも紹介しています。
- ・ 11月7日は、学内では埼玉大学生協第1食堂（11:30～13:30）及びコンビニ（大学会館内）が営業しています。会場周辺には若干の飲食店がありますが、日曜日は休業する店があります。
- ・ お車でのご来場はご遠慮ください。

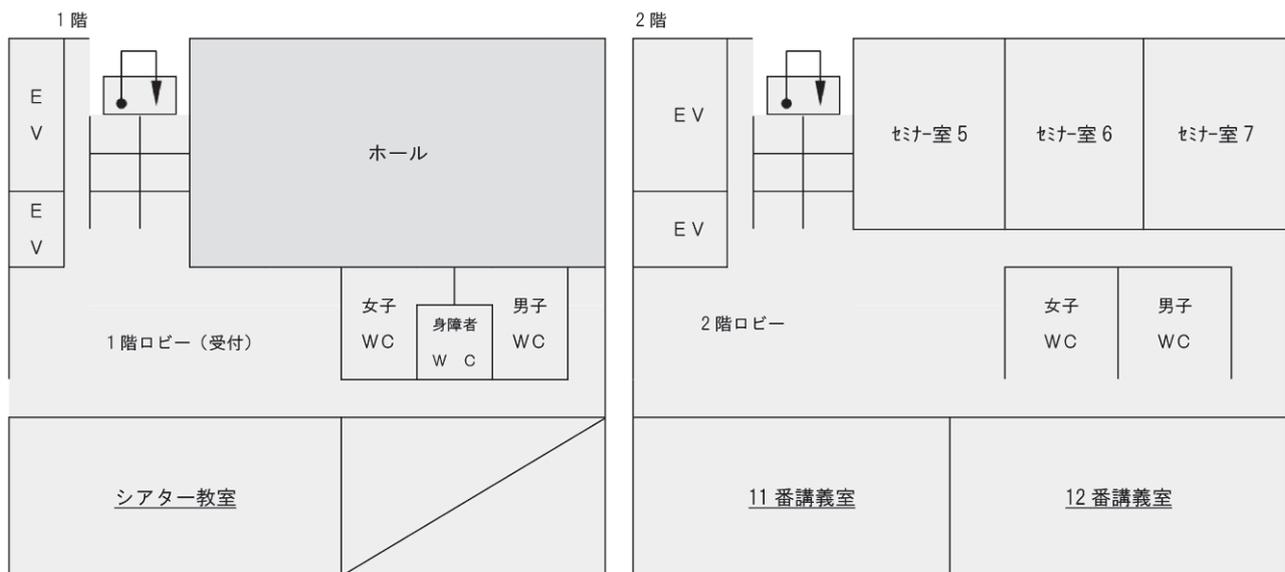
【会場校までの交通機関等】

- ・ 近隣の JR 駅からバスないしタクシーを利用するのが一般的です。
 - JR 京浜東北線「北浦和駅」西口下車→バス「埼玉大学」ゆき（終点）
 - JR 埼京線「南与野駅」下車→北入口バス停から「埼玉大学」ゆき（終点）
→西口バス停から「志木駅東口」ゆき（「埼玉大学」下車）、「埼玉大学」ゆき（終点）
 - 東武東上線「志木駅」東口下車→バス「南与野駅西口」ゆき（「埼玉大学」下車）
- *バスの時刻表は、国際興業バス（株）のホームページ（<http://www.co.jp>）でご確認ください。



【埼玉大学構内地図】





【会場説明】

〈受付〉 総合研究棟 1階ロビー

〈控室・談話室〉 同 1階ホール

〈書籍等販売〉 同 1階ホール

〈発表会場〉 第1会場 (シアター教室) : 開会式, 理事会, 大賞受賞記念講演, 定例総会, ブロック①, ④, ⑦

第2会場 (2階 11番講義室) : ブロック②, ⑤, ⑧

第3会場 (2階 12番講義室) : ブロック③, ⑥, ⑨, ⑩

〈定例総会〉 第1会場 (シアター教室)

〈大賞受賞記念講演〉 第1会場 (シアター教室)

〈各種委員会〉 編集委員会 : 2階セミナー室5, 学会賞選考委員会 : 2階セミナー室6, 広報委員会 : 2階セミナー室7, その他の委員会 : 1階ホール

懇親会のご案内

日時 : 11月7日 (土) 18時10分~20時10分

場所 : 埼玉大学生協第2食堂

会費 : 一般 5,000円

大学院生 3,000円

☆ご出欠のお知らせを 10月25日までにお願いします (conf@yaar.jp.org)。

☆総合研究棟から正門バス停に向かって歩き, バス停手前で左側に曲ると, 突き当りが生協第2食堂です (「埼玉大学構内地図」の67)。

日本ロシア文学会第 65 回研究発表会

報告要旨集

-
- | | | |
|-----|--------------------|--|
| A01 | 山下大吾 | 『青銅の騎士』における西洋古典的要素について |
| A02 | 菅原彩 | レールモントフの物語詩『ムツイリ』における空間 |
| A03 | 井上幸義 | レールモントフの物語詩『デーモン』のタマーラとバラード『タマーラ』の同名の主人公 |
| A04 | 高田映介 | チェーホフの創作におけるダーウィン進化論の影響 |
| A05 | 田子卓子 | ブーニン『スホドール』における語りの可能性 |
| A06 | 林由貴 | イワン・ブーニンにおける「帝国」と「言語」 |
| A07 | 斎須直人 | ザドンスクのチーホンとドストエフスキー: マリーと子供たちについてのムイシュキンの語りにおける聖者伝的伝統 |
| A08 | 上西恵子 | 『罪と罰』における視覚動詞 <i>глядеть</i> の機能 |
| A09 | 泊野竜一 | ドストエフスキーと 19-20 世紀の文学における対話表現での分身 |
| A10 | タラーソワ・ナタリヤ | The Meaning of Graphics in Creative Manuscripts of F.M. Dostoevsky |
| A11 | 河島孝子 | エルショーフ (1815-1869) 『魔法の仔馬 Конек-Горбунук』後の作品にみる文学的志向—生誕 200 周年によせて |
| A12 | 石原公道 | ブルガーコフ学成立試論 |
| A13 | 古宮路子 | オレーシャ『羨望』手稿のヴァリエントを巡る問題 |
| A14 | 古川哲 | 1930 年前後のプラトーフ作品における空虚なもの |
| A15 | 野中進 | V.グロスマンの長編小説におけるメトニミー的原理 (『正義のために』と『人生と運命』) |
| A16 | 笹山啓 | ペレーヴィンはなにから目覚めるのか |
| A17 | 坂中紀夫 | 推理作家ロマン・キムと主体性の問題 |
| A18 | 南平かおり | 児童文学者としての秋田雨雀とロシア文学—童話にみるトルストイの作品の影響— |
| A19 | 初内裕子 | 二葉亭四迷の生年について—文久 2 年 (1862 年) の可能性 |
| B01 | ジダーノフ・ウラヂーミル, 鈴木淳一 | 言語文化的能力育成の主動因としての文学テキスト |
| B02 | 黒岩幸子 | 日本のロシア語教程における「硬・軟母音」の起源と定着について |
| B03 | ラティシェワ・スヴェトラナ | Dictation, An Important Tool for Teaching Russian to Japanese Students |
| B04 | 丸山由紀子 | ロシア語文献における第 2 次南スラヴの影響をめぐって—パホーミイ編集『ラドネシのセルゲイ伝』を資料として |
| B05 | コベルニック・ナディヤ | ロシア語における基動詞への -sya 接辞の付加基準について |
| C01 | 三浦領哉 | 「前国民楽派」期の B.Φ.オドーエフスキーにおける音楽思想の変遷 |
| C02 | 一柳富美子 | 演奏会及び劇場上演データに見る 19 世紀ロシアの音楽界 |
| C03 | 生熊源一 | コンセプトアリズムとアクションイズムのつながり |
| C04 | 内田健介 | 小山内薫はスタニスラフスキー・システムの受容者だったのか? |
| C05 | 松枝佳奈 | 大庭柯公 (1872-1922 頃) と第一次世界大戦下のロシア—従軍ロシア人作家・ジャーナリストたちの視点から |
| P01 | パネル | 在外ロシア文化と同時代の世界
(望月恒子, 諫早勇一, メリニコワ・イリーナ, 澤田和彦, 大野齊子) |
| P02 | パネル | 中世スラヴテキスト研究の新たなアプローチ
(三谷恵子, 服部文昭, 三浦清美) |
-

日本ロシア文学会

2015 年 10 月

**Abstracts of Research Papers Accepted for Presentation at the 65th Annual Assembly
of the Japan Association for the Study of Russian Language and Literature**

-
- A01** Даиго ЯМАСИТА Об античных элементах в «Медном всаднике»
- A02** Ая СУГАХАРА Пространство в поэме Лермонтова «Мцыри»
- A03** Юкиёси ИНОУЭ Тамара из поэмы М. Ю. Лермонтова «Демон» и одноименная героиня из баллады «Тамара»
- A04** Эйсуке ТАКАДА Реминисценции из дарвинизма в творчестве А. П. Чехова
- A05** Такако ТАГО Художественные приемы повествования в «Суходоле» Бунина
- A06** Юки ХАЯСИ Многоязычность и образ империи в творчестве И. А. Бунина
- A07** Наохито САИСУ Тихон Задонский и Достоевский: житейная традиция в сказе кн. Мышкина о Мари и детях
- A08** Кэйко УЭНИСИ Функция глагола “глядеть” в романе Ф.М. Достоевского «Преступление и наказание»
- A09** Рёити ТОМАРИНО О мотиве двойника в диалогических формах в произведениях Достоевского и других писателей в мировой литературе XIX-XX веков
- A10** Наталья ТАРАСОВА Значение графики в творческих рукописях Ф.М. Достоевского
- A11** Такако КАБАБАТА П.П. Ершов и его литературная деятельность после сказки «Конек-Горбунок» —К 200-летию со дня рождения
- A12** Кимимити ИСИХАРА Опыт формирования булгаковедения
- A13** Митико КОМИЯ Проблема вариантов в рукописи «Зависти» Ю. К. Олеси
- A14** Акира ФУРУКАВА Пустота в произведениях Андрея Платонова до и после 1930 года
- A15** Сусуму НОНАКА Метонимический принцип в романах В. Гроссмана («За правое дело» и «Жизнь и судьба»)
- A16** Хироси САСАЯМА После чего проснется Пелевин?
- A17** Norio SAKANAKA The Issue of Subjectivity in Roman Kim's Detective Novels
- A18** Каори НАМПЭЙ Удзюку Акита как исследователь детской литературы и русская литература
- A19** Юко МОМИУТИ Год рождения Фтабатея Симэя —Вероятность того, что он родился в 1862 г.
- B01** Владимир ЖДАНОВ, Дзюньити СУДЗУКИ Художественный текст как базовый фактор формирования лингвокультурологической компетенции
- B02** Юкико КУРОИВА Происхождение и формирование «твёрдых и мягких гласных» в японских учебниках русского языка
- B03** Светлана ЛАТЫШЕВА Роль диктантов в обучении японских студентов русскому языку
- B04** Юкико МАРУЯМА К вопросу о втором южнославянском влиянии в древнерусской книжности — на материале Пахомиевских редакций «Жития Сергия Радонежского»
- B05** Nadiya KOBERNYK The Analysis of Criteria for the Adjunction of *-sya* Affix to Base Verbs in Russian
- C01** Рэйя МИУРА Перемена мысли о музыке В.Ф.Одоевского до периода национальной музыкальной школы
- C02** Фумико ХИТОЦУЯНАГИ Русская музыкальная жизнь 19-го века по данным концертной и театральной деятельности
- C03** Генъити ИКУМА Связь между концептуализмом и акционизмом
- C04** Кэнсуке УТИДА Принял ли Каору Осанаи «Систему Станиславского»?
- C05** Кана МАЦУЭДА Оба Како (1872-1922?) в России во время Первой мировой войны: военные очерки русских писателей и журналистов, сопровождавших армию
- P01** Культура русского зарубежья в окружающих ее мирах
(Цунэко МОТИДЗУКИ, Юити ИСАХАЯ, Ирина МЕЛЬНИКОВА, Кадзухико САВАДА, Токико ОНО)
- P02** Новый подход к изучению средневековых славянских текстов
(Кэйко МИТАНИ, Фумиаки ХАТТОРИ, Киёхару МИУРА)
-

JASRL

October 2015

以下の研究報告要旨は著者に無断で
引用できない。
Not for quotation without the author's
agreement.

【A01】『青銅の騎士』における西洋古典的要素について

山下 大吾

近年、Z. M. Torlone や B. Рудич などの研究をはじめとして、プーシキンの『青銅の騎士』とウェルギリウスの『アエネーイス』とを照らし合わせる解釈が複数行われている。後者はローマ建国の英雄アエネーアースが、その建国の前段階に至るまでの過程と苦難などを主題としつつ、同時に作者ウェルギリウスと同時代の支配者であるローマ皇帝アウグストゥスの統治の正当性や栄光を謳い上げることがを主要な目的としたものであり、このことは、『青銅の騎士』の主要テーマの一つ、ピョートル大帝の言葉や偶像に象徴されている、ロシアという国家、さらには国家そのものの必然的に担うべき運命、あるいは序に見られる大帝並びにペテルブルク賛歌と深く関連するものであるため、その解釈の妥当性は非常に高いものと言えるであろう。

一方でプーシキンは、ホメーロスの叙事詩『オデュッセイア』の序歌の一部をギリシア語原典から抜き書きし、そのロシア語訳を試みており、その作成時は、『青銅の騎士』が執筆された年と同年の1833年と推定されている。『イーリアス』のロシア語訳を完成したグネージチ宛て書簡の中で、自らのギリシア語の素養のなさを正直に告白しているプーシキンが、『青銅の騎士』での更なる主要テーマの一つと言える理想的英雄像のヨーロッパ文学におけるプロトタイプである『オデュッセイア』のギリシア語原典と、その執筆時と同時期に敢えて対峙し、自身の母語に移し替えようと試みた事実には、単なる偶然の域を超えた重要な意義を認めることができるのではないだろうか。

本発表はこのような見地から、先に挙げた諸研究を参照しつつ、『青銅の騎士』における西洋古典を意識したと考えられる要素を、特に『オデュッセイア』との関連を中心として抽出し、それぞれの背景を分析して、その解釈の可能性を探るものである。具体的な参照箇所指摘に留まらず、プロットの類似、作品全体における個々のエピソードの対応関係などに注目する。併せてロシアの一詩人としてのプーシキンが、『青銅の騎士』という作品を通して、特に「序」(вступление) という文学的形式に留めようとした、ホメーロスやウェルギリウスというヨーロッパ文学の先達を意識して記したと想定される詩行も検討の対象とする。

(やました だいご, 京都大学)

【A02】レールモントフの物語詩『ムツイリ』における空間

菅原 彩

本発表ではミハイル・レールモントフの物語詩『ムツイリ(Мцыри)』(1838—1839)を分析対象とし、空間の構成及びその意義を示すことを試みる。

カフカースの自然を舞台に生と自由への情熱をうたったこの作品は、レールモントフの代表作として知られている。山岳民の生れである主人公は幼少時に修道院に連れてこられ、そこで生い育ち、やがてムツイリ(見習い修道士)になる。しかしある夜、彼は嵐に乗じて逃亡し、3日後に傷を負った姿で発見される。そして瀕死の彼が神父に物語するという形でムツイリの3日にわたる冒険が描かれる。

この物語詩では、修道院とその外の世界という2つのトポスが対置されている。Л. А. ホダーネンの研究(1990)によればこの2つは、歴史の直線的な時間の流れと、自然の循環する時間の流れによって区分される。ムツイリの逃亡とは、自然のリズムのもとにある父祖たちの世界への移行なのだ。一方 K. ハンゼン・レーヴェの研究(1993)では、「ここ」を«чужой», 「彼方」を«родной」とみなすロマン主義的な二項対立にもとづいて、作品分析が行われている。そして2つの世界双方から疎外されるという点に、ムツイリの悲劇が見出される。

このようにこれまでの研究では、2つの世界は単一の対比のもとでのみ捉えられてきた。しかし『ムツイリ』ではさらに、主人公の過去から現在という時間軸も考慮する必要があるように思われる。なぜなら2つのトポスはそれぞれ、過去と現在では異なるものとなっているからだ。

例えば修道院の外は、本来ムツイリにとって親しい世界であるにもかかわらず、その強烈な日射しによって修道院から出た彼を衰弱させ、死に近づけさせする。そして同時に修道院は外から彼を守る場として現れてくるのだ。かつては生きる場であった外の世界は、長年の修道院暮らしを経たムツイリには、生きることのできない世界に、外から隔離する「牢獄」であった修道院は、唯一彼が生きられる世界に変わるのである。

こうして2つのトポスの過去の対比に現在の対比が重ねられることにより、ムツイリの外の世界への志向は、叶うはずのないいたづらな夢になりはてる。『ムツイリ』における空間は、ロマン主義的主人公に典型的な「ここ」から「彼方」への憧憬をむなししいものとするのであり、その点にレールモントフの創作の独自性を見出すことができるのではないだろうか。

(すがはら あや, 早稲田大学院生)

【A03】 レールモントフの物語詩『デーモン』のタマーラとバラード『タマーラ』の同名の主人公

井上 幸義

レールモントフのバラード『タマーラ』(1841)における女王タマーラのモデルはだれかという問題は古くから議論されてきた。ダリヤル溪谷の城の主として、旅人を次々に誘惑し、一夜を共にしては死に至らしめ、テレク川に葬る女王タマーラは、グルジアの12~13世紀に実在した賢女王タマーラをはじめいくつかのカフカス伝説の中からそのモデル探求の試みがなされてきたが、未だ定説はない。

本発表では、バラード『タマーラ』が、物語詩『デーモン』の続編を成すものであり、女王タマーラは、『デーモン』においてデーモンの口づけによって息絶えたタマーラのその後の姿である可能性を論じる。

バラード『タマーラ』(全12連)の第5連の最終行は、*мрачный Евнух* で締めくくられている。この言葉は、『デーモン』の最終稿(第8稿)において天使がタマーラを天上に運びながらデーモンに言い放つ言葉「*Исчезни, мрачный дух сомнения!*」を連想させる。また、大文字で表記されている、ハーレムの去勢された宦官 *Евнух* も、『デーモン』において大文字で表される *Демон* を想起させる。さらに、この第5連では、「*демон*», 「*дух*», 「*сомнение*」の3語のアナグラムを2回ずつ読み取ることができる。これらのことは、バラード『タマーラ』に叙事詩『デーモン』との繋がりを示すサインが隠されていること、つまり、『タマーラ』は『デーモン』の続編であり、『タマーラ』の女王タマーラは、『デーモン』のタマーラのその後の姿であることを示唆している。しかし、この『デーモン』のタマーラは、第8稿のタマーラではない。なぜなら、第8稿のタマーラは、天使によって天上に運ばれ、すでに救われているからであり、その後の姿はあり得ないからである。とすると、この『デーモン』のタマーラは、第6稿(1838年9月8日付)のタマーラ、すなわち、デーモンの「口づけによって」その悪しき魂の刻印が押されたまま、天使を追い払ったデーモンが住む死の世界に存在し続けるタマーラということになるだろう。このことは、写しを通して評判となっていた『デーモン』を読みたいという皇后アレクサンドラ・フョードロヴナの要望を受け、レールモントフによって改作され、提出された最終稿の第8稿(1839年初め)が、レールモントフの望むものではなかったことを示唆している。

(いのうえ ゆきよし, 上智大学)

【A04】 チェーホフの創作におけるダーウィン進化論の影響

高田 映介

チェーホフがダーウィンの進化論に強い関心を寄せていたことは周知の事実である。同僚の作家ビリピンに宛てた手紙で、彼は「ダーウィンを読んでいます。こいつは素晴らしい!」と声を上げた。しかしながら、こうした伝記のエピソードを別にすれば、両者の関係についての体系的研究はまだ十分果たされたとは言い難い。

Л. Гросманが「チェーホフの自然主義について」の中でフロベール、トルストイ、モーパッサンに加えてゾラをチェーホフの「主要な教師」に挙げつつ、「自らの一番の教師であるダーウィンによって、チェーホフにはゾラの文学的理論を理解する十分な素養があった」と述べていることに注目しよう。グロスマンは「チェーホフの作品、および彼の才能の成長においてダーウィンは疑いなく大きな役割を果たした。ダーウィンは、チェーホフが正確な文学的方法と厳密な唯物論的世界観を養うのを助けた」「医師チェーホフの教師であるダーウィンは、ある程度まで作家チェーホフの養育者としてみなされなければならない」と指摘している。とはいえ、発表者の関心は前近代的な自然主義文学の復興にあるのではない。「第二帝政下におけるある家族の自然的社会的歴史」の副題を持つルーゴン・マッカール叢書において、ゾラの意図は、祖先の精神的障害に端を発する貪欲・怠惰・狂信などの性質が、子孫の人々の中に、その置かれた環境に応じてどのように現れていくのかを描き出すことにあった。科学哲学者のミシェル・セルが指摘しているように、ルーゴン・マッカール家の人々が繰り広げる人間模様を何世代にも渡って語らしめた「客観性」と「構成力」において、進化論が叢書の最も重要な関連テキストたり得るといふ点が重要なのである。

以上の観点から、本報告は、まず進化論の内部に「この世界を時間的空間的にいかに語り得るか」という認識論的テーマが必然的に含まれることを明らかにする。その上で、生物の進化的変化を神学的・超自然的な合目的論によってではなく、共通の目標も方向も終点も持たないものとして説明したダーウィンの発想の転換に基づき、現在が「あり得た可能性」のひとつでしかないと了解することによって、逆説的に作品の内に一回限りの生の瞬間を描き出すことを可能にしたことこそがチェーホフの創作の革新的手法であることを指摘する。

(たかだ えいすけ, 京都大学院生)

【A05】ブーニン『スホドール』における語り可能性

田子 卓子

『スホドール』(1911)は、18世紀から農奴制末期までの約200年に渡るロシアの辺境の農村に暮らす地主一族の物語である。その物語内容から、地主一族を取り巻く主従関係に封建社会の構造的ゆがみや、作家の生活環境と酷似している題材に自伝的要素が指摘された。時代の趨勢を反映した社会基準が少なからず作品評価に影響を与えたのだとしたら、『スホドール』が誕生して100年以上経った今、当時の時代や環境に束縛されない『スホドール』の新たな見方ができるのではないだろうか。

この小説の虚構世界には存在するスホドールとは、地名である。だがその土地で暮らしたものにたちにスホドールについて語れるものはだれもない。「語れないものをテキストにどうやって存在させるのか」という問いに、本研究は「語られること」よりも「語る方法」に着目し、作品テキストを分析したものである。

近代リアリズム作家たちは小説に現実らしさを求め、作者の介入や、語り手の存在を意識させないように腐心した。もはや語ることに軸を置かず物語が提示できる事を20世紀の小説家、ジョイス、ウルフ、プルー스트らは証明した。テキストの表層に現れないからといって、作者の声や語り手の権威が失われたとはいえない。語りする方法を選択するのは作者自身なのだから、その技法や芸術性を問うことなくして作品の主題に近づくことはできないだろう。作者や語り手の存在を意識しないのは、むしろ語り手の場が固定されず、語り手は複数の場から声を発する自由をあたえられたといえる。一人称の語り手も語り手自身が登場する物語世界と外の物語世界を同時に共有し、自由に行き来することができ、複数の登場人物を視点、また映し手(フィルター)として利用することも可能である。語りの方法の選択肢が多ければ多いほど、物語世界は多極的な見方が求められるはずである。

本発表では、作品テキストから様々な語り形態を例示し、物語世界の中では語ることでできない『スホドール』が多層的な広がりをもつテキストであることを示す。さらに、見過ごされがちなスホドールの声なき者たちの声をテキストから拾い上げたい。

(たご たかこ、東京大学院生)

【A06】イワン・ブーニンにおける「帝国」と「言語」

林 由貴

ブーニンの時代は、革命前後から第2次大戦後までと長く、帝国と言語の再編と未曾有の破壊の世紀に重なる。作家の言語に対するメタな態度は、新たな芸術概念としての提示でも、特定の宗教や民族意識への加担ともいえない。彼は、当時の諸帝国が公的には残さなかった同時代の世界地図を、芸術的に照射し直したのである。

革命以降、民族と言語のイメージは細分化されていくが、これらを総合する流れもあった。西欧カトリック世界には完全言語の探求(エーコ)という「ミッシェンの」伝統があり、これとまったく対置されるイメージとして、ブーニンの言語世界観がある。

さらに、オリエンタリズムが鏡面の乱反射のようにヨーロッパを形作ってきたとする議論は、先ず自己像を強化する他者の必要性という、一方の「都合」の発見と批判という定番の研究手順を踏襲している(フォンターナ)。一方で、批判されるべき対象の文化批判の程度は、もはや単純には割り出せないことを明らかにした点で、近年のオリエンタリズム批判の手法の限界を問うてもいる。

確かに、現在の文化的姿勢が過去のそれを批判する態度は、複数の文化的地位の平等ないし差別の是正、植民地政策等への反省を求めるものである。しかし、世界中の民族文化が対等の地位にあるべきであるという理想の視野は、各民族文化が互いに異なることを大前提としており、実際には、こうした最恵国待遇にも似た視野によって、諸民族の対立が深まり、かつ、互いの差異性の主張によって、対話が却って困難になることは、近現代史に多くの事例がある。

だが、ここでの問題は、文学テキストが、いかに文化的差異性に「気付き」ながら、現代も含めた、様々な認識論上の議論の網に掛らず、価値のヒエラルキー批判の泥沼にも嵌ることなく、固有の文化における視座の普遍性を獲得しうるのか、という点に尽きる。その事例として、ブーニンは、帝国と言語を分析概念とした場合には、より深い示唆を与える作家といえる。

作家のテキストの「主張」の欠如は、自己の表象の消滅をもって他者を世界に刻印する象徴として描かれることから明らかだが、批評界においても、ノーベル賞受賞を経てもなお、本質の評価という点では、埋もれていると言わざるをえない。本発表では、今世紀にブーニンの多言語的なテキストを、現代のアイデンティティー混迷の時代に読みなおすことの意味を中心に考察する。

(はやし ゆき、東京大学院生)

【A07】 ザドンスクのチーホンとドストエフスキー：マリーと子供たちについてのムイシュキンの語りにおける聖者伝的伝統

齋須 直人

18世紀ロシアの聖人ザドンスクのチーホン(1724-83)はドストエフスキーの小説『悪霊』のチーホン、『カラマーゾフの兄弟』のゾシマのプロトタイプの人とされる。チーホンやゾシマのプロトタイプは複数いるが、その中でも、『悪霊』の登場人物の名前としてチーホンの名がそのまま使われていることから分かるように、ドストエフスキーはザドンスクのチーホンを高く評価していた。作家の書簡や創作ノートからもそのことは読み取れる。

ザドンスクのチーホンとドストエフスキーの関係について扱った研究には、B.コマローヴィチ、P.プレトニョーフ、H.ブダーノヴァらのものがある。これらの研究においては、構想されたのみで執筆されることなく終わった『大罪人の生涯』、また『悪霊』と『カラマーゾフの兄弟』に登場する長老のプロトタイプとしてのザドンスクのチーホンについて論じられた。本報告では、まだ先行研究で扱われていない、これらの作品以前に執筆された『白痴』を扱う。

M.バフチンはドストエフスキーの作品の言葉の一つとして、聖者伝的な言葉について論じ、最初にそれが現れたのはムイシュキンの語り(とくにマリーをめぐるエピソード)ではないかと述べている。まさに、このエピソードに登場する子供たちとムイシュキンとの関係は、ザドンスクのチーホンの伝記に見られるこの聖人と子供たちを思わせる。これがおそらく、ドストエフスキーの作品の中でザドンスクのチーホンの伝記や著作からの影響が見られる最初の箇所ではないだろうか。

報告の前半では、作家が、ムイシュキンがマリーについて語るこのエピソードを執筆するさいに、ザドンスクのチーホンの伝記や著作を念頭においていた可能性について、作家の書簡や創作ノートを用いて論じる。そのさい、B.チホミーロフによって2000年に発表された、『罪と罰』が完成してから『白痴』の執筆開始までの期間のもので唯一現存するドストエフスキーのメモが根拠の一つとなる。

後半では、ザドンスクのチーホンの伝記や著作と『白痴』におけるムイシュキンの語りを見比べ、分析する。ここでは特に、伝記の中では聖人と子供にまつわる逸話、著作においては、両親と子供のあるべき関係について論じられている部分に着目する。

(さいす なおひと, 京都大学院生)

【A08】 『罪と罰』における視覚動詞 глядеть の機能

上西 恵子

『罪と罰』と聖書の問題は、今まで国内外の多くの研究者が取り組んできた。国内でも芦川進一氏などの研究があるが、視覚動詞の視点から論じられることはなかった。

『罪と罰』における〈ラザロの復活〉朗読の重要性は、改めて指摘しなおす必要はないであろう。ここでラスコーリニコフは盲人であると定義される。朗読の最後で、「マリアのところに来て、イエスのなされたことを見た多くのユダヤ人たちは、イエスを信じた」という聖句を、ソーニャは自分が目の当たりに見た者のように声高く読み上げる。これが、〈ラザロの復活〉朗読でイタリック体が施された最後の聖句である。

ヨハネ福音書のプロットは、イエスに対する応答としての信仰と不信仰の対立によってその推進力が与えられている。また、この福音書に登場するユダヤ人たちは、異なる世界秩序に属する者たちであり、彼らはヨハネの二元論からすると、この世、罪、悪魔、暗闇、盲目、死などというこの福音書におけるあらゆる否定的な範疇とイメージとに関連づけられている。ファリサイ派の者たちは「我々も盲人ですか」と疑わしうにイエスに尋ねる。イエスは、「私は世の光である」と、自分こそがプロローグで語る光であると表明する。ヨハネ的概念では、罪は光に直面しなかった人の盲目にあるのではなく、光を見ながらそれを拒絶した者たちの盲目にあることが示されている。

ネヴァ河の大パノラマのエピソードの中で、ラスコーリニコフは「一つの不安なまだよくはっきりしない思想」に心を完全に支配される。20コペイカ銀貨をじっと見つめて(поглядеть)、水に投げ込む。その後、彼は一切の人と物から切り離されたように感じる。

この「一つの不安なまだよくはっきりしない思想」、глядеть、盲目と聖書との関係に着目しながら、この作品におけるキリスト論的な罪について考察したい。

(うえにし けいこ, 早稲田大学)

【A09】ドストエフスキーと19-20世紀の文学における対話表現での分身

泊野 竜一

ホフマンやポーの作品に登場する「分身」は、その本体の前に一時的に姿を現し、本体に危害を加えて去っていくだけの形象であることが多い。これに対しホフマンの流れをくむと考えられているポゴレーリスキイ『分身—あるいはわが小ロシアの夕べ』や、ポーの流れをくむと考えられているドストエフスキー『分身』『カラマーゾフの兄弟』となると事情が全く異なっている。そこでは作品に登場する分身が比較的長時間にわたる会話を続ける。会話の内容も議論と呼ぶにふさわしく高度なものとなっている。これらの作品中の分身は本体と旺盛で活発な「対話」を行っているのである。

このような分身の表現方法の違いを詳細に検討するため、19世紀から20世紀初期にかけての、ロシアにとどまらない、さまざまな地域の文学作品中に描かれた分身と本体との対話について検討する。

ここでは、本発表で取り上げる作品を二つの群に分類する。第一は、それほど旺盛で活発な対話を行わず、肉体の死や精神の死である狂気など、本体に災いをもたらす不吉な形象である面が強い「分身」の登場するA群である。A群にはホフマン『悪魔の霊液』、ポー『ウィリアム・ウィルソン』、スチーヴンソン『ジキル博士とハイド氏』、アンドレーエフの『黒い仮面』などが含まれる。日本文学としては分身が登場する明治期の小説としては初のものでとされる泉鏡花『星あかり』を比較検討する。

第二は、本体と分身との間で旺盛で活発な対話が行なわれるB群である。B群にはポゴレーリスキイ『分身—あるいはわが小ロシアの夕べ』、ポー『ボンボン』、ゴーゴリの『鼻』、ドストエフスキー『分身』『カラマーゾフの兄弟』などが含まれる。日本文学としては、ドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』の中の一節、「イワンの悪魔」との関連が示唆されている芥川龍之介『闇中間答』を比較検討する。

とくにB群の作品の分身像に注目することでドストエフスキー作品における分身のモチーフをより明らかにする。それによってドストエフスキーの創作した本体と「分身」との対話の特質を浮き彫りにする手掛かりを提示していくものとする。

(とまりの りょういち, 早稲田大学院生)

【A10】 Значение графики в творческих рукописях Ф.М. Достоевского

ТАРАСОВА Наталья

Особый интерес при изучении рукописного текста Достоевского представляют графические изображения, которые делятся на несколько разрядов: 1) условные знаки; 2) рисунки; 3) каллиграфия. Наименее описана и изучена первая категория – условные знаки. Эти обозначения в большинстве своем не отражены в печати, в том числе и в академическом собрании сочинений писателя, хотя, несомненно, они имеют не только графический, но и эстетический смысл. Анализ условных обозначений Достоевского показывает отношение автора к литературной традиции, значение христианских представлений в формировании художественных идей на стадии черновых записей и в окончательном тексте произведения, а также позволяет точнее интерпретировать художественные мотивы и образы. Наибольшее количество таких знаков появляется в рукописях к роману «Подросток» и к «Дневнику писателя». В докладе рассматриваются наиболее интересные символы, семантика которых важна для формирования художественных замыслов автора (изображения профиля/носа, креста, солнца). Принципиально важно разграничивать рисунки и знаки в рукописях Достоевского. Рисунки динамичны, они могут видоизменяться: даже если автор пытается воспроизвести один и тот же образ, каждый рисунок, особенно портретный, имеет черты индивидуальности. Знаки, по сравнению с рисунками, более функциональны: их основное предназначение – тематически соединить записи согласно авторской идее. Рисунки, по сравнению со знаками, более иллюстративны, нередко они становятся графическим аналогом словесного образа (например, портреты создаваемых автором персонажей, появляющиеся в черновых записях к романам). В докладе предложены примеры использования рисунков и каллиграфии в творчестве Достоевского.

(タラーソワ ナタリヤ, ロシア文学研究所)

【A11】エルショーフ (1815-1869) 『魔法の仔馬
Конек-Горбунук』後の作品にみる文学的志向—生誕 200 周
年によせて

河島 孝子

『魔法の仔馬』(1834) が初めて日本で出版されたのは、明治 43 年 (1910 年) 11 月、『僂人の馬』(稲村露園編、富田文陽堂・富文館) の書名で児童文学として紹介された。それ以来、昭和 22 年 (1947 年)、平成 7 年 (1995 年) まで間断なく出版がなされ続け、児童文学の世界で広く普及した。その後、「せむし」が差別用語に含まれていることもあり、平成 18 年 (2006 年) 田辺佐保子氏による翻訳出版 (論創社) があったものの、長いこと出版が途絶えている。

しかし、ロシアでは 1834 年の初版後、1844 年から約 10 年間の検閲による出版禁止期間を除き、現在に至るまでその出版回数は限りなく続き、児童文学の古典として親しまれている。西シベリア出身のエルショーフはペテルブルグ大学卒業後、トボリスクで中学校の教師となって学生の育成に励む傍ら、多くの作品を書き続けた。

今年エルショーフの生誕 200 年に当たり、故郷のイシム (Ишим) で記念行事が行なわれた。チュメニ国立大学イシム分校とエルショーフ文化センター主催によるもので、本年 3 月 5-6 日、「エルショーフ。19-21 世紀の文化における生涯と作品。生誕 200 年によせて П.П. Ершов. Жизнь и творчество в контексте культуры XIX-XXI веков. К 200-летию со дня рождения」という国際学術会議として催された。参加者への呼びかけ案内文に示されたテーマは、①19 世紀文学と批評におけるエルショーフの位置。②エルショーフとシベリアの宗教文化の問題。エルショーフと正教。③スカースカ『せむしの仔馬』、叙情詩、戯曲、散文。④フォークロアとエルショーフの作品。⑤祖国と地域の歴史におけるエルショーフの作品。等が挙げられていた。

日本においては、冒頭に述べたようにエルショーフといえは『魔法の仔馬』の作者としてのみ認識されている。ところが、エルショーフはその後も文学に係わり続け作品を書いていた。このことは本学会において発表された記録はなく、日本ではあまり知られていないといえよう。

本報告では、エルショーフ生誕 200 年を期し、これまで取り上げられることのなかった『魔法の仔馬』後のエルショーフの作品をいくつか選択し、それらの作品の傾向や文学的志向、そしてエルショーフ作品のアイデンティティーなどについて考察を試みる。

(かわばた たかこ、早稲田大学)

【A12】ブルガーコフ学成立試論

石原 公道

1940 年 3 月 10 日ブルガーコフ死亡。葬儀後遺作刊行会が組織され、莫逆の友 C. ポポフに伝記を依頼、しかし書かれた伝記は、刊行会がなんらの成果なく終わったことで発表は後年 1991 年であった。未亡人エレナのもとに長編「巨匠とマルガリータ」タイプ稿、戯曲「トゥルビン家の日々」等々の作品が残された。最初はエレナ単独で、その後次第に批評家、若き研究者等と共に原稿類を整理して、1955 年『トゥルビン家の日々、最後の日々』、1962 年『モリエール氏の生涯 (ЖЗЛ シリーズ)』等が、そしてついに 1966、69 年雑誌『モスクワ』で『巨匠とマルガリータ』が発表されるや否や所謂〈ブルガーコフの季節〉を迎えることとなった。それ以後 80 年前後から研究書の類が発表され、1979 年 2 番目の妻ペロゼルスカヤ回想記、83 年ヤノーフスカヤ『ミハイル・ブルガーコフ創作方法』、86 年スメリャンスキー『芸術劇場のミハイル・ブルガーコフ』、88 年エレナが精力的に集めた諸氏による『ブルガーコフ回想録 (後書きチュダコーワ)』、チュダコーワ『ミハイル・ブルガーコフ伝記』が現れ、その序文で作家イスカンデルは「最初の学問的伝記」と書いたが、その内実が十分問われることはなく、この言葉だけが一人歩きし、チュダコーワの権威が確立してしまったようである。というのも 70 年に亡くなるエレナは原稿類をレーニン図書館 (現国立図書館、ブルガーコフアルヒーフ)、関連文書等をプーシキンダムに収め、ヤノーフスカヤはアルヒーフが使えなくなり、他の研究、発見等に向かい、90 年に『エレナの日記』を刊行した。73 年芸術出版社から『長編集』、89-90 年同社『5 巻本選集 (「巨匠とマルガリータ」ヤノーフスカヤ校訂)』が刊行されテキストの問題が起こる。91 年ブルガーコフ生誕百年を迎えブルガーコフ学は隆盛を極めるように思われるが、その後エレナを直接に知る研究家ローセフ (アルヒーフ 2 代目管理者)、ミャフコフ『ミハイル・ブルガーコフの親族』等々がなくなり、2011 年にはヤノーフスカヤが逝去した。彼女は 13 年『最後の本もしくはヴォランドの三角形』を残しその内容は、例えばチュダコーワの『伝記』を補って、ここでブルガーコフ学成立を見ることが出来る旨、報告したい次第である。

(いしはら きみみち、関東支部)

【A13】オレーシャ『羨望』手稿のヴァリエントを巡る問題

古宮 路子

本発表は、Ю. К. オレーシャの代表作『羨望』の手稿を対象とし、その特徴や、そこからわかる作品生成のプロセスについて明らかにしようとするものである。

オレーシャは5年の執筆期間を経て、1927年6月に『羨望』を完成させ、翌7月には雑誌『赤い処女地』に第1部を掲載した。その手稿は全てではないものかなりの点数が残っている。手稿には2種類が存在する。オレーシャの死後、未亡人オリガ・スオクが個人的に保管し、周囲のオレーシャ研究者に閲覧を許していたものと、中央国立文学芸術文書館(ЦГАЛИ)に寄贈されたものである。中央国立文学芸術資料館に寄贈されたものは、その後、ロシア国立文学芸術文書館(РГАЛИ)に引き継がれ、同館では現在1214葉が保存されている。しかし、オリガ・スオクが個人的に保管していたものについては、未亡人の死後、所在不明となっている。本研究はロシア国立文学芸術文書館所蔵の手稿を対象とするものである。

『羨望』の手稿は、日付が付されておらず、正確な執筆時期や執筆順序を特定することが不可能であるとはいえ、内容から3つの時期に大別される。作品の題名が『羨望』ではなく『無益な事物』だった最初期、『羨望』という題名のもと様々なストーリー案が練られた中期、雑誌掲載版に近いかたちの作品が一気に書き上げられた完成間近の時期である。中期までの原稿では、主要登場人物のみならず雑誌掲載版には登場しない人物が重要な役割を演じ、全く異なるストーリーを持つものが数多く存在する。

中期までの手稿の形式面での最大の特徴は反復である。オレーシャは『羨望』を書く際、予め作品全体の構想を練っておくことをせず、思い浮かぶままに場面を書き連ねる方法をとった。そこでは、得心のいく場面が描けるまで、同一の場面が何度でも冒頭から書き直されている。そのため、中期までの手稿には、はじまりが同じで、途中から内容が分岐しているものが多数存在する。本発表では、同一の場面のヴァリエントを比較することによって、同時期にどのような複数のストーリー展開の可能性が模索されていたかを検証する。

(こみや みちこ, 駒澤大学)

【A14】1930年前後のプラトーフ作品における空虚なもの

古川 哲

アンドレイ・プラトーフ(1899-1951)の作品には、ロシア革命とその後のソビエト連邦の歩みに対する批判、あるいは吟味が一貫してみられる。特徴的なことは、歴史的な出来事に対する一義的な評価を作品から読み取ることが難しいということだ。むしろ、プラトーフ作品において特徴的な判断のあり方とは価値判断の保留であり、本発表ではこの点について詳しく検討する。

扱う作品は、『疑惑を抱いたマカール』(1929年発表)、『土台穴』(1930年完成)、『ためになる』(1931年発表)である。これら三つの作品を選んだ理由は二つある。第一に、新経済政策から五カ年計画、つまり市場経済から計画経済への転換期に、同時代の歴史をテーマとして書かれたという共通点を持っていること。したがって、第二に、共通の歴史的な背景のもとでの各作品の比較を行いやすいためである。

本論文で注目するのは、三つの作品における、空虚なものへの価値をめぐる考察である。この要素はこれまで、個別の作品についてより断片的に議論されてきた。

『疑惑を抱いたマカール』においては、手先が器用だが論理的に考えることが不得手な主人公マカールは、「からっぽの」頭を持つとされる。それに対して行政手腕に長けたチュモヴォイは、「からっぽの」手を持つとされる。また『土台穴』では、空虚さは、未来において何かが到来する余地がある状態として肯定的にとらえ返される。『ためになる』においても、空虚さに関する同様の肯定的な評価を読み取れる。

三作品を比較することで、次のようなことが言える。それぞれの作品において、それぞれ別の側面から、重工業化が優先される時代のソ連社会が描かれる。一貫して空虚さは可能性をはらんだ状態の象徴として肯定的に位置づけられている。その上で、『ためになる』においては、放浪する主人公の視点から、コルホーズ以外の農場での、様々な農業のあり方が示される。その際、主人公は、どの農場に対しても、最終的な判断を保留しつつ、批判的な態度をとり続ける。この態度は、ソビエト政権との衝突を、不可避的なものとした。というのも、政権はあらゆる領域で異論を封じつつ、公式に認められるもので社会を満たそうとしたからだ。逆に言えば、『ためになる』が激烈な批判を受けたのは、異論に対する寛容さを守ろうとしたからだといえる。

(ふるかわ あきら, 聖心女子大学)

【A15】 V.グロスマンの長編小説におけるメトニミー
的原理 (『正義のために』と『人生と運命』)

野中 進

グロスマンの二部作『正義のために』『人生と運命』は独ソ戦を主題とした大作である。本論では二作品におけるメトニミー的原理に着目し、それが複数のレベルで支配的機能を担っていることを論じる。

「メトニミー的原理」という用語で意味するのは、部分と全体の関係に基づく描写、または「隣接的關係」(ヤコブソン)を辿って展開する描写への志向である。ヤコブソンの有名な定式によれば、リアリズムでは隣接性=換喩の系列が、ロマン主義や象徴主義では類似性=隠喩の系列が支配的になる。グロスマンの場合、作品の諸レベルで前者の系列が著しく支配的である。

(1) 比喩のレベル:ここでは隠喩の系列と換喩の系列の緊張関係が認められる。どちらの比喩も多い。トルストイを意識した「状況の直喩」も多用されている。

(2) 描写のレベル:提喩的細部を好むことがリアリズムの特徴(ヤコブソン)とすれば、グロスマンは典型的リアリストである。トルストイの「赤い小さな靴」の如く、グロスマンも一つの対象を描くとき、その細部を記述することで全体像を描き出す。

(3) プロット展開のレベル:さらに特徴的なのは、グロスマンにおいてはプロット展開においてもメトニミー的原理が働くことである。ある人物についての叙述は彼/女の家族・友人・隣人の叙述に拡がる。その結果、メインプロットに直接の関係をもたない〈ミニナラティブ〉が数多く挿入される。グロスマンに特徴的な巨視的でありつつも微視的な構成はここから生じる。

一般的に、長編小説は多くのミニナラティブを集積する手法/構造をもつ。具体的にどのような手法/構造を使うかは作家によって異なる。グロスマンの場合、メトニミー的原理がその役割を果たす。

(4) 主題のレベル:部分と全体のつながり、ないし「有機的全体」の主題がソ連期ロシア文学の伏流をなしていた(中村唯史)とするならば、グロスマン作品にもそれが当てはまる。『正義のために』では部分と全体のつながりは明確かつ静的に示された。それはこの作品の社会主義リアリズムへの帰属を意味する。

他方『人生と運命』では、部分と全体のつながりの脆弱さが前景化される。社会や生全般の部分と全体のつながりはくり返し疑われ、汚され、否定される。だがその度ごとに、新しいつながりの形象が与えられ、有機的全体の探求は続く。それがこの作品の主題的ダイナミズムを作り出している。

(のなか すずむ, 埼玉大学)

【A16】 ペレーヴィンはなにから目覚めるのか

笹山 啓

ペレーヴィンの筆名を一躍高めた初期の代表的長編『オモン・ラー』(1991)は、ソ連の宇宙政策を材にとりながら作家曰くソ連人の「内的宇宙」の内実を描き切った快作であるが、物語は最後、決死の逃走劇で疲労し眠り込んだ主人公が地下鉄のホームで目を覚ますシーンで幕を閉じる。まるで物語全体が主人公の見ていた夢であったかのような幕切れ、グロテスクなファンタジーとしての作品の価値を損ないかねないこの「目覚め」というモチーフはなぜ導入されねばならなかったのか。こうした疑問を念頭にあらためてペレーヴィンの他作品を眺め渡してみると、「眠り(夢)」あるいは「目覚め」という題材が頻出していることに気づくだろう。

N・ベネヴォレンスカヤとO・ボグダーノヴァはある論文で、『ジェネレーション P』(1999)、『数』(2003)などの長編にテーマ的な発展が見られないという見解を示したうえで、初期の短編「眠れ」(1991)がその後のペレーヴィンの創作に登場する諸々の重要なテーマ群をすでに含んでいたと主張する。そのうちのひとつが、題名が示唆するところの「眠り」である。この物語で登場人物たちは眠りながら日常生活を送る。睡眠はソ連社会の現実から目をそむけるための防衛機制のようなものとして機能しており、他人のしている夢の内容を探ろうという主人公の試みは社会秩序を脅かすものとして警戒される。

アメリカの政治哲学者S・バック=モースは、1991年のソ連崩壊によって共産主義イデオロギーがアメリカ的資本主義に敗北したという通俗的な図式を排し、両国が20世紀を通じて大衆ユートピアの建設を希求しある意味では相互に補完しあいながら時代を駆動してきたこと、ソ連の崩壊がそのユートピアの「夢」そのものを危機に陥らせたことを指摘した。こうした意見を考慮しつつふたたびペレーヴィン作品に目を転じると、作家が夢や眠りをテーマに作品を描くことは、20世紀世界の隠れた駆動因への批判という意図を持つてのことではないかという考えに行き当たる。またここでさらに、ペレーヴィンが創作の初期段階から東洋の宗教思想への関心を保持し続けていることを考え合わせるなら、「目覚め」という主題に宗教的な趣を感じるとは自然である。こうした読み解きによって、「ペレーヴィン=ポストモダニスト」という教科書的な理解にとどまらない、ソ連の地下文化との有機的なつながりを持った彼の創作の実態が明らかになるだろう。

(ささやま ひろし, 東京外国語大学院生)

【A17】推理作家ロマン・キムと主体性の問題

坂中 紀夫

ロシア・ソヴィエト探偵小説の先駆けとも評されるロマン・キム（1899-1967）は、作中でしばしば同時代の欧米における自然科学や社会科学の議論を引用している。彼はスパイ小説的な作品も残しているが、その登場人物たちはときに、これらの知識を活用することで、うまく立ち回ろうとするのだ。例えば、医学や薬学といった応用科学は、標的となった相手を生理的なレベルで操作する手段を彼らに与えてくれる。ここでキムは、内面的なプロセスを経ることなく、主体に働きかける技術に目を向けているのだと言えるだろう。

こうした傾向は、彼の社会科学的な言説の引用の仕方からも確認できる。そこでは観相学や性格分析といった心理学的な人間の類型論や、対人関係術、噂の研究、扇動の方法といったより能動的に人間を操作する社会学的な議論が参照されている。これらはよりマクロなレベルで人間を分類し、働きかけるための知識だ。つまりここでもキムは、主体性が確率的に操作可能な問題であるとの議論に目を向けているのである。

ある個人がどのような人物であるかは、一定程度、断定でき、操作もできるというこのいわば外面的な主体化の議論を、しかしキムは実は肯定視しているわけではない。例えば、「天使の検査」という短編では、二人の男が職業適性を調べに来る。彼らは刺激に対する知覚機能を測られ、心理テストや運動能力テストを受け、高い職業能力を保証される。しかし、物語は結局、彼らが犯罪者であったことが明かされて終わるのだ。つまりここには、「優れた社会人である」との外面的な主体化を冷笑し、失効させる意図が含まれているのである。

この解釈を裏打ちするキムの実体験のエピソードがある。大粛清の際、彼は自身に関係のないスパイ容疑をかけられる。そこで彼は自分が日本人であり、元外相の私生児であると告白し、この高い確度で虚偽と思われる発言でなぜか銃殺刑を免れた。つまり彼は、「お前はこういうものだ」という外面的な主体化をさらに逸脱させたのである。

外面的な主体化とは、現代的な問題でもある。今日では個人情報を集め分析すれば、内面的な確信とは関係なく、その人の個性を容易かつ客観的に示すことができる。キムはある意味でこの状況を先取りし、現実でも作品でも外面的な主体化を逸脱させる選択を取ったのだ。当発表は、この選択の含意を明らかにし、そこに潜む現代的な意義を引きだすことを目指している。

（さかなか のりお，同志社大学）

【A18】児童文学者としての秋田雨雀とロシア文学
～童話にみるトルストイの作品の影響～

南平 かおり

日本の児童文学界に、ロシアの文学作品を翻訳・紹介してきた人たちはどのような人たちであったのか。

児童文学雑誌の金字塔ともいわれる「赤い鳥」誌が、漱石門下の鈴木三重吉によって、大正7（1918）年に発刊された時期以降を調査してみても、児童向け雑誌や文学全集にロシアの文学作品が頻りに掲載されていたことは明らかだ。

こうしたロシアの文学作品の翻訳・紹介の仕事を手掛けた児童文学者のなかには、ある時期、楠山正雄、浜田広介、前田晁、水谷まさるなど東京専門学校（早稲田大学の前身）及び早稲田大学の英文科の卒業生が多く見られた。劇作家、詩人、社会活動家として知られる秋田雨雀（1883-1962）もその一人であった。

秋田雨雀の場合は、大正10（1921）年に『露西亜童話集』などロシア文学作品の翻訳集を出版している。しかし、それだけにとどまらず、ロシア文学、特にトルストイの児童向けに書かれた作品に大いに感化され、自ら童話を執筆する際、トルストイの児童観を参考にすることもあったと考えられる。

これまで、童話作家としての秋田雨雀の研究は重層的に行われており、ロシア文学、殊にトルストイの作品からの影響についても言及されているが、個々の童話においてその具体的な検討は、充分になされてきたとは言い難い。

本発表では、雨雀の創作活動のなかで、特に大正8年頃から10年頃までの童話に注目し、トルストイの作品から得たインスピレーションが、作品のなかにどのように息づいているのかということに具に考察したい。雨雀自身は大正8年以前にもすでに童話を発表していたが、「はっきり児童文学を書こうという考えを起したのは大正8年である」と述べ、その起因に、トルストイの影響があったと書き記している。この時期は、雨雀が娘に独自の教育を施していた時期とも重なる。この事実と雨雀のトルストイ受容には深い関連があると思われるので検討したい。

秋田雨雀の初期の童話作品のなかに見られるトルストイの思想を考察することは、取りも直さず、大正中期から後期にかけての日本児童文学界におけるトルストイ受容の一つの傾向を明らかにすることにも繋がる。同時代の児童文学者、楠山正雄や浜田広介のトルストイ観と、雨雀の場合とはどのような違いがあったのか。後の児童文学の世界で、雨雀のトルストイ観はどのように受け止められたのか、探っていきたい。

（なんぺい かおり，早稲田大学）

【A19】二葉亭四迷の生年について—文久 2 年 (1862 年) の可能性

靱内 裕子

二葉亭四迷の生年については文久 2 年 (1862 年) と元治元年 (1864 年) の二説がある。現在, ほとんどの研究者が元治元年説をとっているが, 発表者は新資料を用い文久 2 年説の可能性を示す。二葉亭は明治 11 年, 12 年, 13 年の三回, 陸軍士官学校を受験し落ちている。2 回目は「学科不合格」, 3 回目は「身体不合格」であった (1 回目の落第理由は不明)。発表者が発見した受験要項によると当時の受験可能年齢は「満 16 歳以上満 22 歳以下」であった。二葉亭が元治元年生まれだとすると明治 11, 12 年は受験資格がなかったはずである。文久 2 年生まれならば明治 11 年に満 16 歳となり, 受験資格を得られる。

さらに試験内容も判明した。年齢制限と身体検査に合格しなければ学科試験に進めなかったのである。これまでの推測では, 二葉亭は 1, 2 回目の受験は学科試験で落ち, 3 回目の試験は学科に合格しながら身体検査で落第した (おそらく近視のため) とされてきたが, 実際は 2 回目の受験では身体試験に合格したが学科試験でおち, 3 回目の受験では前年に合格していた身体試験に落ちて学科試験に進めなかったのである。

陸軍士官学校を断念した二葉亭は明治 14 年に東京外国語学校に入学した。先行研究では見落とされていたが, 明治 14 年の受験要項では入学資格が「18 歳以下」と規定されている。文久 2 年生まれだとすると二葉亭は満 19 歳で受験資格がなかったはずである。

元治元年生まれだと陸軍士官学校の受験資格が, 文久 2 年生まれだと東京外国語学校の受験資格がなかったはずであり, どちらかの受験で年齢を偽ったことになる。陸軍士官学校の入学願書には府知事 (又は県令) の書名が必要であった。役人を父にもつ二葉亭が年齢を偽って受験したとは考えにくい。一方外語の出願書類は本人の署名だけで良く, 陸軍士官学校ほど厳密ではなかった。現時点で判断する限り, 二葉亭の生年は文久 2 年と考える方が自然であろう。二葉亭の年齢が 2 歳繰り上がるとすると, 対露思想の揺れ動きを経験し軍人を志したという早熟な少年像を修正する必要が出てくる。

本発表と同じ要旨の拙論が学会誌にも掲載されるが, 誌面に載せきれなかった資料を皆さんに実際お見せするために口頭でも発表することとした。特に陸軍士官学校受験希望者に配布されたと推測される受験要項小冊子の実物 (明治 16 年のものになるが) は発表者の私物であり, 手にとって見ていただくことが可能である。

(もみうち ゆうこ, 早稲田大学)

【B01】 Художественный текст как базовый фактор формирования лингвокультурологической компетенции

ЖДАНОВ Владимир, 鈴木 淳一

Задача формирования лингвокультурологической компетенции, которая рассматривается в современной методике РКИ как основополагающая, успешно может быть решена, когда в комплексе аспектного преподавания на соответствующем уровне владения языком используются русские художественные тексты. Русский художественный текст рассматривается в культурологическом аспекте как мифологическая вербально сотворённая реальность, владеющая сознанием людей, выражающая авторское видение мира на базе русского языка и национально-культурного сознания. В последнее время работа с художественным текстом уходит на периферию преподавания РКИ, хотя именно русские художественные тексты, в первую очередь прецедентные тексты русской классической литературы, открывающие глубинные истоки русского национального сознания и в тоже время наполненные универсальным гуманистическим пафосом, несущие заряд созидательной энергии, могут быть наиболее эффективным инструментом постижения и вхождения в русский мир. Вследствие лингвоцентризма, присущего, по мнению исследователя В.Елистратова, русской ментальности, ценность русского художественного текста прежде всего определяет языковой фактор, представляющий богатство и виртуозность русской речи, метафоричность, словесную игру, широкое обращение к крылатым словам и идиомам, к разного вида разговорным клише, речевым стереотипам. Знаковыми особенностями русского художественного текста могут выступать и другие факторы, например, категории соборности и пасхальности, представленные в трудах И.Есаулова. В заключение делается вывод о необходимости должного выбора художественного текста, критериями которого выступает не столько сюжетоцентризм, актуальность, сколько такие факторы, как культурно-историческая значимость, потенциал русской ментальности, богатый, красивый и относительно доступный язык.

(ジダーノフ ウラジーミル, すずき じゅんいち,
札幌大学)

【B02】日本のロシア語教程における「硬・軟母音」の起源と定着について

黒岩 幸子

日本のロシア語教科書の多くは、文字と発音の説明の冒頭に「硬母音」と「軟母音」の対応を提示している。近年は、「字」を加えた「硬母音字・軟母音字」が主流になっているが、どちらもロシアでは用いられない概念である。ロシア語の子音は硬口蓋化 (palatalization) の有無によって硬軟に区別されるが、母音に硬軟の別は立てないからだ。

なぜ、「硬・軟母音」は日本のロシア語教程に根づいたのだろうか。その起源と定着のプロセスを明らかにし、ロシア語教育の現場で、学習者が発音と文字・つづりの関係を合理的に修得できる方法を改めて検証することが本報告の目的である。

「硬・軟母音」という用語は、日本初の本格的なロシア語学習書であるセルゲイ・グレーボフ『露西亜文法』(1898年)にすでに使われており、同書を参考にして書かれた八杉貞利『露西亜語学階梯』(1916年)にも記載されている。八杉の著作は増補、改訂を重ねて『八杉ロシア語教本』(1961年)として復刊され、長く読み継がれた日本のロシア語教科書の原型と言える。ただし、グレーボフや八杉が提示したのは、硬母音 a, y, э, o, ы と軟母音 я, ю, е, ё, и という対応ではなく、э を外して o-e (ё) を対応させた、語尾変化のために重要と考えられていた母音対応だった。э-e の対応を含む母音対応表が日本で使われるようになるのは、ドゥシャン・トドロヴィチ『露語発音解説』(1914年)からだ。その後、二つの対応表が無批判に踏襲されていったと考えられる。

ロシアの学校教科書などにも 20 世紀初頭までは、「硬・軟母音」の記載が見られたが、ボドアン・ド・クルトネやシチェルバラペテルブルグの言語学者たちの努力もあり消えていった。

音声、音韻、文字を混同して、ロシア語の母音が硬軟に分かれるかのように説明する「硬・軟母音」という概念は、いずれ日本でも使われなくなるだろう。しかし、教科書から「硬・軟母音」が消えても、ロシア語の音声学習をいかに効率的に進めるかという問題は依然として残る。ロシアで出版された外国人用のロシア語教科書の中にも、発音とつづりに関する不正確な記述は少なくない。日本語話者に適したロシア語の発音と文字の提示方法の検討は、その後のロシア語学習を効率的に進めるためにも有用であるはずだ。

(くろいわ ゆきこ, 岩手県立大学)

【B03】Роль диктантов в обучении японских студентов русскому языку

ЛАТЫШЕВА Светлана

Применение диктанта как формы контроля знания языка (как родного, так и иностранного) имеет многовековую историю, на всем протяжении которой ведутся дискуссии об эффективности диктанта и как метода контроля, и как метода обучения. Расширение сферы международного общения, распространение передовых коммуникационных технологий, появление современных интерактивных методов обучения как родному, так и иностранному языку дало повод многим преподавателям и методистам ставить вопрос о том, что диктанты устарели, перестали отвечать требованиям новых методик преподавания.

Нам представляется, что диктант, даже в его самой традиционной форме, отнюдь не исчерпал своих возможностей ни как средство контроля знаний учащихся, ни как средство обучения языку. В особенности велика его роль при преподавании иностранного языка, фонетика и грамматический строй которого сильно отличаются от фонетики и грамматического строя родного языка обучаемых, как, например, в случае обучения японских студентов русскому языку.

В научной и методической литературе подробно разбирается роль диктантов в преподавании русского языка как родного или как иностранного для англоязычных студентов. Существуют также работы, посвященные роли диктантов в преподавании английского языка для японских учащихся. В настоящем выступлении автор, на основе личного опыта преподавания русского языка японским студентам, попытается проанализировать специфические особенности диктанта в процессе преподавания.

Представляется, что при обучении русскому языку японских студентов диктанты играют важную роль в трех аспектах: во-первых, в фонетическом, во-вторых, в грамматическом, и, наконец, в-третьих, диктант развивает и дает возможность оценить навыки аудирования и анализа текста. Кроме того, диктанты, предлагаемые японским студентам, изучающим русский язык, имеют ряд особенностей как с точки зрения подготовки текста, так и с точки зрения критериев его оценки.

(ラティシエワ スヴェトラーナ, 上智大学)

【B04】ロシア語文献における第2次南スラヴの影響をめぐって—パホーミイ編集『ラドネシのセルギイ伝』を資料として

丸山 由紀子

15世紀モスクワ・ルーシで活躍したセルビア出身の文筆家パホーミイ・ロゴフェートは、1417–1418年にエピファニイ・プレムードルイが著した『ラドネシのセルギイ伝』に対して、一連の新たな編集版を生み出した。そして近年、M.A. Шибяевがパホーミイの『セルギイ伝』直筆原稿を発見し、その校訂テキストを発表した。M.A. Шибяевは、この直筆原稿は第4編集版（B.M. Клоссの分類による）に最も近いとしている。

本報告ではこの直筆原稿（РНБ, Софийское собр., №1248, лл. 329-375）と第4編集版（РГБ., Троиц. №116, лл. 355-396об.）を使用）を比較し、その言語的差異を検討する。14世紀末から15世紀、ロシア教会スラヴ語は南スラヴの影響が強まったが、報告者の分析によれば、直筆原稿と第4編集版の違いはこの、いわゆる「第2次南スラヴの影響」関連にほぼ集約される。第2次南スラヴの影響に関しては、これまで主にM.G. Гальченко, A.A. Турилов, B.A. Успенскийらが研究してきた。中でもM.G. Гальченкоは14世紀末から15世紀に成立した教会文献を分析し、第2次南スラヴの影響に関連する各要素の使用頻度、時間的推移等を明らかにした。その成果は第2次南スラヴの影響を研究する上で不可欠である。ただし、ルーシで成立した作品を元に南スラヴの出身者が著した直筆原稿と、ルーシで流布したほぼそれに近いと思われる版の言語を、第2次南スラヴの影響の観点から比較するという研究は、これまで類がない。パホーミイの『セルギイ伝』直筆原稿は未だ本格的な言語分析がなされていないが、パホーミイ研究のみならず、ロシア教会スラヴ語における南スラヴの影響を具体的に検討する上でも貴重な資料である。

ロシア教会スラヴ語における「第2次南スラヴの影響」で実際問題とされるのはブルガリア語の影響である。直筆原稿で頻発するセルビズム「Аの代わりにeの使用」は第4編集版で徹底的に排除されている。一方、「子音間の流音+イエル」が直筆原稿では東スラヴ風に綴られているのに対し、第4編集版では南スラヴタイプとなっているケースがある（полкъ – плъкъなど）。両者を比較することは、当時ルーシの書き手たちが南スラヴの影響をどのように捉え、実践していたかを明らかにする上で大きな手がかりとなる。

（まるやま ゆきこ, 外務省研修所）

【B05】ロシア語における基動詞への-sya接辞の付加基準について

コベルニツク ナディヤ

ロシア語には-sya接辞が基動詞に付加されるパターン(1a-c)と付加されないパターン(2a,b)がある。

(1) V-syaのパターン

- a. Vt-sya: (прятать – прятаться)
- b. Vi-sya: (хвастать – хвастаться)
- c. V*(-sya): (смеяться, сомневаться)

(2) *V-syaのパターン

- a. *Vt-sya: (благодарить, поздравлять, будить)
- b. *Vi-sya (быть, потеть, плавать, происходить)

本発表では、-sya接辞が基動詞に付加するパターン(1)及び付加されないパターン(2)を分析し、-sya接辞の付加の基準を検討する。

付加の基準を検討する際に以下のパラメーターを用いる。

- ・基動詞の自他
- ・基動詞が表す意味
- ・基動詞の体（完了体動詞・不完了体動詞）
- ・基動詞に付加されている接頭辞

また、『現代ロシア語頻度辞典』(Lyashevskaya & Sharov 2009)に記載されている動詞を基にして発表者が行った調査で得られたデータを用いる。

分析の結果、-sya接辞の付加性が最も高いのは他動詞と変動動詞であることが分かった。また、自動詞は-sya接辞が付加され得るが、全体の2割程度であることが分かった。

また、意味の観点から分析を加えると、-sya接辞が最も付加されにくいのは、存在、移動、病状、状態、状態変化などの意味を持つ基動詞である。他方、-sya接辞が付加されやすいのは加害的行為、動作の過程、他者に向けられた感情、対象物の移動を表す基動詞である。

（コベルニツク ナディヤ, 法政大学）

【C01】「前国民楽派」期のB.Φ.オドーエフスキーにおける音楽思想の変遷

三浦 領哉

本発表は、B.Φ.オドーエフスキーの初期著作における音楽思想を芸術哲学の枠内で捉え直し、その変遷を検討するものである。発表者はこれまでオドーエフスキーの活動初期における音楽思想について、西欧音楽の受容に焦点を当てて個別的に検討してきた。その過程では18世紀のウィーン古典派の音楽（とりわけF.J.ハイドン(1732-1809)作品)に対するオドーエフスキーの評論の視座がすでにロマン主義的であったこと、またロマン派音楽のさらに先を行く、非常に先進的で20世紀的とも言える音楽哲学が文筆にあらわれていることが明らかとなった。しかし、オドーエフスキーの音楽思想を見渡すためには、それがどのような基礎の上になるものであり、どのような思想的系譜に連なっているのかを明らかにすることが必要になる。

オドーエフスキーの音楽に関わる文筆活動は1822年から亡くなる1869年まで続いたが、その傾向はグリムカによって『イワン・スサーニン』が発表された1836年を境に大きく変化している。この1822年から1836年はオドーエフスキーの音楽に関わる著作活動の初期であり、自身が中心的役割を果たした愛智会 *Общество любителей* の活動から、「国民楽派」的思想がその評論における基調となるまでの期間と考えることができる。この時期のオドーエフスキーの文筆における大きな特徴は、極度に抽象的・概念的な音楽美の探求であり、この特徴は愛智会の思想と大きく関わっていると考えられよう。しかしオドーエフスキーの音楽論におけるその哲学的源泉は、愛智会や彼らが大きな影響を受けたドイツ観念論のみに求めうるものではない。カントやシェリングの哲学がオドーエフスキーの思想における基礎をなしている一方、とりわけ音楽思想においては中世ヨーロッパの音楽哲学や18世紀西ヨーロッパの自然哲学からも大きな影響を受けていることがその著作から読み取れる。

本発表では、対象をオドーエフスキーの評論のみならず芸術に関する著作全般へと広げ、その「前国民楽派」期(1836年以前)における音楽思想の変遷を、とりわけそれ以前の芸術哲学・一般美学との関わりを中心として検討する。

(みうら れいや, 早稲田大学院生)

【C02】演奏会及び劇場上演データに見る19世紀ロシアの音楽界

一柳 富美子

ロシア音楽史と言えば、「グリムカによって確立された芸術音楽が、次世代の「ロシア五人組」やチャイコフスキーらによって国民楽派として全盛期を迎え、20世紀初頭には西欧と肩を並べるまでに成長した」という筋書きが、権威ある単行本や音楽事典にも堂々と掲載されている。もしこの記述が正しいならば、帝室劇場からの依頼によって1862年10月29日(露暦)にサンクトペテルブルグで行われたヴェルディ(1813~1901)の歌劇《運命の力》の世界初演は、このロシア音楽史のどこにどうやって入り込んでいたのだろうか？

確かに、ロシア音楽だけを取り出せば上記のような記述が可能かもしれないが、音楽界全体を見渡すと圧倒的に西欧音楽が優勢で、19世紀後半までのロシアでは「ロシア音楽」は殆ど演奏されていなかったのである。ロシア音楽史の様々な矛盾点に関しては、声楽作品の楽譜を体系的に分析することにより、発表者は過去の研究発表会に於いて独自の知見を提案してきた。今回は楽譜から離れ、ロシア国内のオペラ初演データ及び演奏会記録を整理することによって19世紀ロシア音楽界の実像を概観し、ロシア音楽史の新しい展望の提示を試みる。

主に資料として用いたのは、ソ連時代末期の1985年から2011年まで27年にわたって刊行された『ロシア音楽史』全10巻(分冊を数えると実際は全13巻)の巻末付録として掲載されている演奏会データである。例えば、1826年から1850年までの25年間にサンクトペテルブルグとモスクワの全劇場で上演された演し物の初演合計350回のうち、オペラに分類されたものは129回。この中でロシア人作曲家によるロシア語オペラ初演は僅か16回で、残りは全て西ヨーロッパの歌劇だった。

このように、ロシアで実際に鳴り響いていた音楽の跡を辿ることによって初めて、19世紀のロシア人音楽批評家たちが盛んに国民主義を標榜した立場も、また素人だったムーソルグスキイが帝室歌劇場でのオペラ上演を許可されたことにも納得がいく。

(ひとつやなぎ ふみこ, 東京芸術大学)

【C03】コンセプチュアリズムとアクションイズムのつながり

生熊 源一

本報告が目にするのは、ソ連崩壊以後の芸術界の変動によって生じた、異なる世代・流派の芸術家たちの出会いである。とりわけ報告者が扱う 80 年代末から 90 年代中盤にかけてのモスクワでは、ギャラリーやインスタレーションといった美術システムが導入されると共に、多種多様な芸術家たちが自らの表現を世に問うて行った。その中には、ソ連時代から非公式に活動を行ってきたモスクワ・コンセプチュアリズムやソツ・アートの面々、ソ連崩壊期になって活動を始めた後にアクションイズムと呼ばれる過激な活動家たち、また特定の流派への分類が難しい独特の個性などが並存していた。これらの芸術家たちは個人としての創作を探求しつつも、それと同時にモスクワという芸術的磁場の一端を担ってきたと言える。この文化的布置において両極として機能したのが、モスクワ・コンセプチュアリズムとアクションイズムと呼ばれる二つの潮流だと言ってよいだろう。世代の交代という視点から見れば、旧世代のコンセプチュアリストたちに代わって登場したのが新世代のアクションIST たち、ということになる。この際アクションIST の面々、とりわけアナトーイ・オスモロフスキイは「コンセプチュアリズムとの対決」という戦略を主張することになるが、両者の関係は対立という構図のみで説明できるものではない。実際には、両者の間に代補的な関係が存在したのではないか、というのが報告者の仮説である。

この点について検証する上で重要な論点となるのが、人間／動物の境界というテーマだと思われる。すなわち、しばしば「形而上学的」と呼ばれるコンセプチュアリズムの活動は、その思弁性的一方で、多くの局面でモチーフや比喩として動物的形象を取り入れてきた。さらに、コンセプチュアリズムと通ずるところの多いソツ・アートの代表者、コーマル&メラミードが猿や象といった動物にカメラや筆を持たせたことを思い出してもよいだろう。このようなソ連／ロシア芸術における動物というテーマを、もっとも過激な形で継承・発展させたのがアクションIST たちだと考えられる。その他にも、アクションIST たちがいかにコンセプチュアリズム等の先人たちの活動を参照しているか確認し、コンセプチュアリズムとアクションイズムの結び付きを明らかにしたい。

(いくま げんいち, 北海道大学院生)

【C04】小山内薫はスタニスラフスキー・システムの受容者だったのか？

内田 健介

本発表の目的は、自由劇場や築地小劇場を創設し、日本の新劇の基礎を築いた小山内薫が、いかにして俳優養成法であり演技の技術であるスタニスラフスキー・システムを受容したのかを明らかにするのではなく、これまで定説となってきたスタニスラフスキー・システムの日本の最初の受容者としての小山内のイメージが誤りであったことを明らかにすることである。

小山内薫は 1912 年、1927 年と 2 度ロシアに渡り、特に最初にロシアを訪れた 1912 年にはモスクワ芸術座の舞台を観劇しただけではなく、スタニスラフスキーの邸宅に招かれて芸術座の劇団員たちと年越しのパーティを経験するような幸運にも恵まれている。そして、このロシアでの観劇体験を元に、自由劇場ではゴーリキーの『どん底』、近代劇協会ではチェーホフの『桜の園』、のちに築地小劇場でチェーホフの『ワーニャ伯父さん』、『三人姉妹』、『桜の園』の演出を行った。しかしながら、これらはモスクワ芸術座のスタニスラフスキー演出の日本への移植であり、小山内薫がスタニスラフスキー・システムを受容していたかどうかは定かではない。これまで小山内へのスタニスラフスキー・システムの影響は、小山内が『桜の園』演出をした際の様子を紹介した「桜の園の演出者として」(『演劇新潮』1926 年 11 月号)という文章や、小山内の演出助手をしていた水品春樹や八田元夫らが稽古場の小山内の指示を回想した文章などから、小山内は稽古の際にスタニスラフスキー・システムを用いていたとされてきた。だが、どの先行研究でも小山内がいかにしてスタニスラフスキー・システムを学んだのかについては明らかにされておらず、小山内が俳優にたいして行っていた稽古がスタニスラフスキー・システムであったのかどうかの検証も不十分なままである。

そこで、小山内薫の他の文章との比較や、慶應義塾大学に残されている小山内文庫などを利用し、小山内がスタニスラフスキー・システムを知る可能性があったのか、また本当にシステムを利用していたのかについて再検証を行い、それらの資料から、小山内薫はスタニスラフスキー・システムの存在を知っていた可能性は高いが、その方法そのものを知る機会は晩年までなく、また晩年にはその機会を 1927 年の二度目のロシアの旅で得たにもかかわらず、活かす間もなく 1928 年に亡くなってしまったという結論が導き出されたことを明らかにする。

(うちだ けんすけ, 千葉大学)

【C05】大庭柯公（1872-1922 頃）と第一次世界大戦下のロシア—従軍ロシア人作家・ジャーナリストたちの視点から

松枝 佳奈

昨年、第一次世界大戦（1914-1918）開戦 100 年を迎え、ロシア国内では関連書籍・研究書の出版や展覧会等の開催が相次いでいる。同大戦は、その開戦直後に当時『東京朝日新聞』記者であったジャーナリスト・文筆家・ロシア研究者の大庭柯公（1872-1922 頃）が在ペテルブルク特派員としてロシアに滞在、日本人記者として初めてロシア軍に従軍し、従軍通信や観察記など優れたロシア関係のルポルタージュを残した点で、日露文化交渉史研究においてもきわめて重要であると考えられる。先行研究では 1914 年 8 月から 1915 年 5 月まで大庭のロシア特派やロシア軍従軍の事実は紹介されてきたが、テキスト分析を含む彼のロシア特派・従軍の詳細やその意義、共に従軍した他の記者たちの活動については全く検討されてこなかった。

本発表は、大庭と共に従軍した五名のロシアの知識人（作家・ジャーナリスト・画家・軍人）たち—Bac. И. ネミーロヴィチ=ダンチェンコ（1844-1936）、A. M. フォードロフ（1868-1949）、C. H. スィロミャトニコフ（1860 年生、没年不詳）、H. И. クラフチェンコ（1867-1941）、K. シュームスキー（生没年不詳）ら—の新聞掲載記事および従軍ルポルタージュのテキスト分析を試み、第一次世界大戦下のロシアにおける大庭の活動の実態を客観的に考察するものである。以上の人物とテキストの存在は、いずれも発表者の調査により初めて確認された。ロシア人知識人たちと大庭の戦場描写や戦況の考察には差違が見られ、従軍ルポルタージュの多様性とそれに起因する限界を浮き彫りにしている。また五人のロシア人の多くが日本滞在経験を有し、従軍記者中唯一の日本人であった大庭に好奇と好意をもって彼の活動を描写する場面も見受けられ、彼らにとって大庭が当時のロシアの日本への接近を象徴した存在の一人であったといえる。以上の検討を通じて、特派当時に雑誌新聞に掲載された大庭執筆記事、および彼の従軍記『露西亜の戦線より』（富山房、1915 年）などのテキストに立ち返ることで、日露戦争後のつかの間の日露友好の時代に、大庭がロシアの知識人たちとの交流を通じて大戦下の同国を好意的かつ親日的に捉え、その様子を活写することで、日本社会のロシアへの心理的距離を縮めようと努めた彼の姿勢が明らかになるはずである。

（まつえだ かな、東京大学院生）

【P01】パネル 在外ロシア文化と同時代の世界

十月革命とそれに続く内戦の結果、さまざまな理由でロシアを離れた人々の中には、芸術家やアーティスト、学者など、文化の担い手が多数含まれていた。時の経過とともに、彼らの運命は、ソ連への帰国を選択した者と、異郷に残った者に分かれた。亡命を選択しても、ロシア語で書き続けた詩人や作家たちのように、ソ連と異なる独自の特徴を持つ在外ロシア文化を発達させた者もいれば、亡命ロシア人社会の枠を破って、より広い世界で活躍した者もいた。それぞれの道の選択は、芸術家たち自身の人生や創作にとってどんな意味を持っており、彼らの文化的営みは彼らを取り巻いていた世界にとって、どのような意味合いを持っていたかを探りたい。

亡命の第一の波でロシアを離れた人々が築きあげたロシア文化は、現在では、複合的な20世紀ロシア文化の構成要素のひとつとして高く評価されている。従来から盛んに研究されてきた文学のジャンルだけでなく、芸術の諸分野への関心も高まり、それに加えてヨーロッパ以外の地域、特に中国や日本など東アジア地域の研究も広く行われるようになってきている。

在外ロシア文化研究のそのような状況を反映させて、本ワークショップでは、地域やジャンルを限定せず、美術・映画・学問・文学など幅広い分野を取り上げ、芸術家や知識人の運命と創作活動を具体的に提示し、亡命文化や越境という現象について考察する基盤を作ることとしたい。

司会：望月恒子（北海道大学）

対論者：大野斉子（宇都宮大学）

発表

1. 「エコール・ド・パリ」に見られる文化の共生

諫早勇一（名古屋外国語大学）

「エコール・ド・パリ」の芸術家たちにはロシア（帝国）出身者が多かったことはよく知られている。ただ、言語を媒体としない造形芸術家たちにとって「ロシア」の持つ意味はさまざまだろう。ここではロシアに帰国しなかった画家マレーヴナ、一時的滞在者エレンブルグ、ソ連への帰国者ファリクなどをとり上げて、当時のパリにおける文化の共生について考える手がかりとしたい。

2. エミグレーションと [レ] エミグレーション：トゥルジャンスキーとプロタザノフの映画作品における芸術的戦略

メリニコワ・イリーナ（同志社大学）

ロシア人映画監督のV.トゥルジャンスキーとY.プロタ

ザノフは、ほぼ同時期にフランスへ亡命し、ヨーロッパでの製作活動を始めた。ヨーロッパ滞在中、二人はロシア文学の古典の映画化や、オリエンタリズムに依拠した作品の演出を行うなど、外国の映画観客の関心を引くために、同じような芸術的戦略を取った。1924年、プロタザノフはソビエト・ロシアへ帰国し、終身ソビエト映画を作り続けたが、トゥルジャンスキーは西ヨーロッパに残り、1937年以降はドイツで映画製作に従事した。二人の映画人が歩んできた経歴や、彼らが産み出した作品の内容と形式を検討することで、亡命者が築き上げた映画史と帰国することを選んだ映画人が貢献した映画史における相違を明らかにしていきたい。

3. ミハイル・グリゴリエフと満鉄のロシア語出版物

澤田和彦（埼玉大学）

グリゴリエフはチタ陸軍士官学校で日本語を学び、1920年に来日。陸軍士官学校と参謀本部などでロシア語を教えた。1939年にハルビンに移り、南満洲鉄道株式会社（満鉄）のロシア語雑誌「Восточное обозрение」に谷崎潤一郎、志賀直哉、川端康成など数多くの日本文学の作品のロシア語訳を発表。また芥川龍之介『地獄変』、菊池寛『恩讐の彼方に』、夏目漱石『坊っちゃん』などのロシア語訳を刊行した。

4. アルセーニイ・ネスメーロフの亡命と創作

望月恒子（北海道大学）

白軍将校の経歴を持つアルセーニイ・ネスメーロフは、1924年にウラジオストクからハルビンに亡命して、約20年間ハルビンを代表する詩人・作家として活躍した。1945年に侵攻してきたソ連軍に逮捕され、ソ連領に移送されて、国境付近の中継監獄で病死した。1920-40年代の極東・東アジアの複雑な政治情勢のもとで、ハルビンで亡命者として生きた作家ネスメーロフを手がかりとして、在外ロシア文学の「東方の枝」が存続した状況とその意味について探る。

【P02】パネル 中世スラヴテキスト研究の新たなアプローチ

中世スラヴテキストにはアポクリファというジャンルにまとめられる物語群がある。それらの多くはビザンツ経由でスラヴ世界に入ったものだが、中には、テキストの伝承経緯やスラヴ語訳の成立事情が不明なものもある。こうしたテキストは、さまざまに書き換えられながらスラヴ各地に伝播したこともあり、スラヴ圏でも十分な研究がされてこなかった。このパネルでは、このような、未解明の部分が多い中世アポクリファテキストをテーマに、テキスト伝播と書き換えの関係、テキストの形成と受容文化の関係、同じコンピレーションの中に現れる他のテキストとの関係といった、テキストの“文学的環境”（литературное окружение）に注目しながら、それぞれがテキスト分析を行った成果を報告する。なお本パネル報告は、スラブ・ユーラシア研究センターによる平成27年度プロジェクト型共同研究『中世スラヴ語テキストの多元的研究—スラヴ文献言語学の新たなアプローチをめざして』の一部をなすものである。

司会：三谷恵子（東京大学）

発表

1. 『賢者アキールの物語』の最古のロシア版

服部文昭（京都大学）

『賢者アキールの物語』（以下、ПАП）は、キエフ・ルーシ以来、知られた教訓説話である。ドゥルノヴォらは、写本群を第一世代から第四世代まで分類して、第一世代が基本形だとみなす。第二世代以降は構成が短縮・簡略化される。本発表は、第一世代の最古のロシア版を取り上げる。第一世代の諸本は成立年代や場所を特定するために、互いに比較研究されてきた。作品の構成要素と配列、さらに、《文集》の中に一緒に含まれることが多い他の作品は何か、などが研究の焦点となる。《文集》について補足すると、中世のロシアや南スラヴではビザンツからの影響もあり、さまざまな作品（外典、教訓説話、教父もの、百科全書の著作など）を集めた読み物のアンソロジーがジャンルとして存在した。ПАПの写本も、このような《文集》の構成作品として受け継がれてきた。今回は作品の構成要素と配列の問題を中心に主な写本の異同を比較し、広くスラヴ語圏の ПАП の視点から改めて最古のロシア版の位置づけを考える。

2. 『十二の金曜日の物語』スラヴ・リセンションのテキスト比較研究試論

三谷恵子（東京大学）

中世スラヴ世界において『アポクリファ』としてジャ

ンル化される物語群の中には、スラヴ圏に広く見られながら、その伝播や翻訳の経緯がいまなお明らかでないものがある。そうした物語の一つに『十二の金曜日の物語』（以下『十二金曜日』）がある。『十二金曜日』については、このテキストに関する先駆的研究者である A.N. ヴェセロフスキーによって、クリメント・リセンションとエレウテリ・リセンションの二系統があること、前者は西欧およびスラヴ圏に知られるが、後者はスラヴ圏にしか確認されていないことが明らかにされている。

エレウテリ・リセンションは、ロシアおよびブルガリア、セルビア、さらにはカトリック圏ダルマチアまでの南スラヴ圏に伝わっているが、これらの写本を縦断的に扱ったテキストロジック的研究はいまだなされていない。この発表では、南スラヴ圏のエレウテリ・リセンションがさらに二つのサブリセンションに分かれることを示し、これらとロシア写本の異同を確認する。その上で、『十二金曜日』が作り出すテキストの連続体としてのスラヴ世界の姿を、その《文学的環境》—同じ文集に現れる他のテキストとの関係—に参照しながら明らかにする。

3. 中世ロシアの想像力—アポクリファ『ラザロ復活の物語』、『十字架の木についての講話』をめぐる

三浦清美（東京電気通信大学）

本報告では、旧約聖書、新約聖書とその周辺の諸説話と、中世ロシアにあたえられた時代状況を結びつける働きをした中世ロシアの想像力のあり方を検証したい。

ロシアで最初の年代記、『過ぎし年月の物語』は、ルーシ（ロシアの古名）の歴史（「どこからルーシの国が起ったか」）を描くにあたり、旧約聖書のノアの大洪水とノアの子供たち、セム、ハム、ヤベテの支配領域の分配までさかのぼった。ルーシの歴史は、旧約聖書の描く人類の歴史のなかに位置づけられ、それを基礎として、自らの想像力をつうじてその基盤を内実化する「物語」として描かれた。聖書のエピソードを核とした想像力による飛躍こそ、中世ロシアにおける歴史記述と文学の本質であり、なかでもこの特徴が際立つのが、アポクリファ、すなわち、聖書外典・偽典である。

本報告では、アポクリファのなかでも、12世紀終わりから13世紀はじめにかけてルーシで成立したと考えられる『ラザロ復活の物語』、15世紀末にブルガリアを経由してモスクワ大公国に流入したと考えられる『十字架の木についての講話』を材料にして、中世ロシアにおける歴史的・文学的想像力のあり方について考察したい。